

昭和の終わり頃、労働時間短縮や労働時間法制



を中心とする労働基準法の改正が次々となされました。労働時間に関する直接の法改正は一段落しましたが、近年では、ワークライフバランスのあり方として、休暇取得な

どについての目標設定がされてきています。これにあわせて、余暇の使い方について政府全体としての提言が出されています。

長い間、余暇の使い方一番は「テレビ」、その次が「読書」だとされてきました。しかし、

国民の生活は多様化し、インターネットの普及はもちろん、通信機器の進化に伴い、書籍に対する国民の関心は、徐々に薄くなっているようにも思えます。通

勤電車の中では、スマホのゲームに夢中になる若者がたくさんいて、戸惑います。小説を読んでいるのは5人に1人くらいでしょうか。文字離れが相当進んでいると理解する場面です。

しかしながら、文学についての関心は、まだまだ揺るぎないものだと考えます。読書を余暇時間にするという人は、年齢

にかかわらず、一定数いるというのが、統計上は出されています。その中でも、短歌・俳句の短詩型文学がその一翼を担っていると言っても過言ではないでしょう。短歌・俳句は、戦後の第二芸術論を乗り越えた後、その隆盛を誇ることとなりま



みに高齢化が進んでいます。歌壇では、最近と

すが、逆に学生の参加も増えていきます。やはり、歴史や風土が文学の土台を支えているのだと思います。

さて、あまりに有名すぎてここで書くのも気が引けますが、愛知県の名の由来についてご紹介し

ます。桜田へ鶴鳴き渡る年魚市 潟潮干にけらし鶴鳴き渡

る 『万葉集』巻三 高市 黒人

年魚市潟は「あゆちがた」と読みます。「潮が干いたらしい。干潟で餌をとる習性のある鶴が海岸を目指して鳴きながら飛んでゆく」という意味になります。桜田は今の名古屋市南区笠寺一帯をさします。地下鉄鶴里

駅近在の村上社には歌碑が建てられています。愛知県の愛知はこの「年魚市」から転じた

とされています。万葉の昔から、短歌をもとに地名が周知され、文学の題にされてきたのです。文字と風土の融和が「歌枕（古来からの歌の名所）」として、現実に姿を現すだけではなく、言葉だけでイメージができるまでとなりま

海、八橋、伊良湖崎が歌枕として有名です。特に、八橋は別格でしょう。愛知県の花はカキツバタですが、その出自は『伊勢物語』、在原業平東下りのエピソードです。

から衣／きつつなれにし／つましあれば／はるばる来ぬる／旅をしぞ思ふ

折句と言いますが、句頭に「かきつばた」の5文字をいれて、知立の無量寿寺にて詠んだとされている歌です。八橋はかきつばたの名勝地です。

この故実に基づいて愛知県の花はカキツバタとされています。歌枕が、短詩型文学のひとつのツールとして現在でも受け継がれています。このように、歴史や風土が人々の生活を支えているのです。現代の名古屋における歌枕は、主税町、榎木町、鍋屋町だといわれていますが、それはまた後日ご紹介いたします。

イラスト・伊藤栄章